

氏名(本籍)	まる やま ひろし 丸 山 宏 (茨城県)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 乙 第 1975 号
学位授与年月日	平成 15 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	道教儀礼文書の歴史的研究

主 査	筑波大学教授	文学博士	片 岡 一 忠
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	古 家 信 平
副 査	筑波大学助教授	博士 (文学)	楠 木 賢 道
副 査	筑波大学教授	文学博士	堀 池 信 夫

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、道教の儀礼において道士が神、鬼、死者の霊といった信仰の客体にあてて発出した儀礼文書の形式、内容を分析することによって道教儀礼文書の歴史の変遷を解明することを目的とする。全体は序章、本論3部13章、結章2章からなり、末尾に史料・参考文献目録を付す。

本論文では、六朝隋唐時代の天師道の章を取めた『赤松子章曆』、宋代の靈宝法の文書を取めた『上清靈宝大法』といった『道蔵』所収の文献のみでなく、著者が台湾南部で実施した調査で収集した現地の道士の所蔵する「文検」と称される儀礼文書の範例集を基本資料として利用することから、本論文は天師道の成立から現代に至る道教儀礼文書の歴史的研究といえる。

「序章」では、従来の道教史研究が教典の時代考証と儀礼の思想史的意義に集中して、道教儀礼の中心をなす儀礼文書の内容と儀礼実践での文書的使用方法について十分な検討がなされてこなかったことを指摘し、道教史を通時的に把握することの必要性を主張し、その方法として道教の歴史とともに作成された儀礼文書を総合的に分析することによって道教史を通時的に把握することが可能となるとする。

第一部「六朝より唐宋に至る天師道の儀礼と儀礼文書－上章儀礼と章の研究－」は、5章からなり、天師道という道教最古の宗派の儀礼で使用された儀礼文書である章について考察する。その第一章「冢訟を分解する章について」と第二章「治病の章について」は、「章本の研究」と副題が付されており、民衆のもっとも恐れる災いである、墓から祖先の罪により子孫に災いがもたらされることを解決するための章と病気を治すための章について、ともにその章の本文を中心に儀礼構造を分析して、祖先の犯した罪を避ける「冢訟章」が重視されたこと、そこに冥界と墓地をめぐる民間信仰への配慮を看取できることを指摘し、道教の教戒に違反すると神に制裁され、鬼である故気にとりつかれて病を得ることから、太上老君に上章して謝罪し鬼を退散させることを願うという儀礼構造を明らかにした。第三章「受籙の章について」では、「敦煌出土文書スタイン 203 号」にみられる『度仙靈籙儀』を分析して、天師道の入信儀礼を復原し、そこでの師匠から弟子に授与される籙の内容とその場面での章の使用を具体的に明らかにした。第四章「儀礼と言葉－道教儀礼における言葉の多元性－」では儀礼に現れる韻文や口頭語を検討して、場面における文書のちがいによって

儀礼用語、言葉がかわる。例えば高位の神に発する章で用いられる世俗の文語的な行政文書の言葉、宋代以降に生まれた儀礼での仏教や民間巫者の儀礼と類似した平易な言葉、また鬼神や亡魂と直接交流する場面での言葉、というように場面によって用いられる言葉にも違いが存することを文献史料と現地調査から明らかにした。第五章「宋と高麗の道教青詞に関する比較考察」では、知識人の書く青詞という儀礼文書について、高麗では国家的な道教儀礼が多く、個人の家庭生活まで浸透していないのに対して、南宋では国家から家庭に至る広範な場面で青詞が作成されているとして、両者の違いを指摘する。

第二部「現代台南道教の儀礼と儀礼文書－文検を中心とする歴史的研究－」は、5章に分けて、現代道教儀礼と儀礼文書に見られる特徴を過去に溯って解明する。第一章「道壇と神々の歴史」では、儀礼空間を、初期の天師道の治靖、六朝時代の靈宝齋の道壇、宋代以降の道壇の順で分析し、醮のための道場が齋のための道壇の機能を兼ねる形で一本化され、現代台南地方でみられるような道壇が成立したとともに、南宋代に道壇の儀礼空間が拡大したことを指摘する。第二章「玉壇発表科儀考」は、もっとも多くの儀礼文書を発出する玉壇発表科儀が秘訣に依拠する宗教技法を駆使する秘儀であること、それが南宋の靈宝法を基盤としつつ呪術の天心法を多く援用していることを明らかにする。第三章「台南道教の功德儀礼」では、高雄県での現地調査に基づき、実際の儀礼プログラムが南宋代の儀礼と特徴を共有していることを明らかにした。そして第四章「台南道教の功德文検」では、第三章で示された功德儀礼の特徴を現在使用されている89の文書を分析して文書の面から明らかにしたものである。第五章「台南道教の奏職文検」では、現在道士の職位を神に上奏する儀礼に使われる奏職文検を宋明代の文書と比較分析して、高位の神への文書には普遍性が見られるが、中下位の神への文書には地域性が散見されることを指摘する。その背景として道教の発展とともに神々が増えるにしたがって神と人間とを結びつける文書が膨大になり、文書に地域性が生まれたと考えられる。

第三部「道士による道教儀礼学と道教界批判」は3章からなり、第一部、第二部とは視点を変えて、道教儀礼を担い儀礼文書を作成する道士が持つ儀礼に関する知識を検討することから儀礼文書を考察する。第一章「張萬福の道教儀礼学と唐代前半期の道教界」では、唐の張萬福の著作から、当時は上章と醮祭を行う天師道の祭酒が社会で大きな影響力を発揮していたことを明らかにした。第二章「金允中の道教儀礼学と南宋後半期の道教界」では、『上清靈宝大法』に基づき、南宋代に儀礼文書を含む儀礼装置の増加傾向や技法の内向化を指摘できるとする。第三章「台南道教と『道蔵秘要』」では、台南の道士が儀礼知識を学ぶ類書である『道蔵秘要』について、それが明代中期に成立したこと、天師道の儀礼理論に依拠する内容を有することを明らかにした。第一章は第一部に、第二章は第二部にそれぞれ対応し、第三章は現在の道教儀礼の有様を示したものといえる。

「結章」は2章からなる。(一)「総括的の道教儀礼史論」は「道教儀礼と民間信仰の時代区分論の試み」と副題が付されているように、本論の分析結果をふまえて道教儀礼史の時代区分を提示する。それは二期に分けられ、第一期は後漢末の天師道成立以来、高位の神へ上呈する章が一貫して用いられ、その文書の種類は少なかったが、第二期の南宋以降は靈宝法の儀礼が定着し、文書の種類、数量ともに急増する傾向をもつことを指摘して、儀礼文書の変遷は道教儀礼自体の変遷を明示する重要な指標であり、現代の儀礼文書には歴史的に生じた儀礼文書の変遷の結果が重層的に集成され反映されていると結論づける。(二)「全体的まとめと今後の課題」では、以上考察した、道教儀礼文書研究の成果と意義を述べる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、後漢末の五斗米道に起源をもち、現在もなお漢民族社会に大きな影響力を有する道教の宗教者である道士が儀礼を行う際に用いた儀礼文書の歴史の変遷を分析した研究である。従来、道教儀礼文書は個

別の事例に則して利用され、分析されてきたが、本論文では、それらの先行研究を総合的に再検討するとともに、通時的に捉え直したものである。その際、歴史的文献だけでなく、現在道士が実際に使用している「文檢」と呼ばれる儀礼文書の範例集をも、実際の儀礼実践における具体的な時系列の中で文書の使用方法や上呈の技法、道士の意味づけを調査することによって積極的に利用する。これらの分析により、歴史的文献を生きた実用文書として蘇らせた点は従来の研究にはみられないことであり、まず評価されるべき点である。さらに、その成果を踏まえて現代の儀礼文書と南宋代や明代の儀礼文書との比較を行い、道教儀礼文書の歴史の変遷を解明したこと、全体の分析結果から道教儀礼史の時代区分論を展開し、現代の道教儀礼のもつ歴史的重層性を明確に指摘したこと、など評価すべき点は多い。すなわち、本論文は、道教儀礼文書という膨大な史料群の解読に果敢に挑戦し、多方面からの読み込みと慎重な検証を行い、そこから道教儀礼史の鳥瞰図を提示した研究として、今後の道教史研究の道標となるといえる。以上の点から、本論文が学界に貢献するところ大であると認められる。

なお、研究の目的は十分に達成されたといえるが、本研究成果を得た現在、儀礼文書とそれを生み出した地域社会の政治文化、経済活動との関係、儀礼文書に記載されない儀礼として、民衆のあいだに広範に浸透している道教儀礼の実践の中にみられる童乩（タンキー）の存在と道士との関係、儀礼全体の中での両者の役割の違いや民衆の関わりについて、今後検討されることが求められよう。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。